

## 研究ノート

東日本大震災7年後の災害公営住宅における  
心のケアボランティア活動から得られた看護学生の学び

岸田 るみ\*・内潟 恵子\*・高柳 千賀子\*・吉岡 洋治\*

**要旨：**本研究の目的は、東日本大震災7年後の災害公営住宅における心のケアボランティア活動から得られた看護学生の学びを明らかにすることである。対象はNPO法人主催の東北被災地ボランティアツアーに参加した学生12名、データ収集は質問紙法による自由記述方式の調査をボランティアツアー前とツアー中に実施した。分析は質的データ分析法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。その結果、心のケアボランティア活動における学びには、[災害公営住宅の住民との関わりから得た学び]と[ボランティア活動の仲間との関りから得た学び]が認められ、その学びにより学生には[内面の変化・成長]がみられることがわかった。また、この3者には相互作用、相互促進がみられた。被災地視察により学生の震災と被災者への理解が深まり、心のケアボランティア活動の事前学習としての効果が確認された。

**キーワード：**東日本大震災, ボランティア活動, 看護学生, 災害公営住宅

Nursing Students' Learnings from the Experience of Volunteer Activity  
for Mental Health Care at Disaster Recovery Public Housings Seven  
Years after the Great East Japan Earthquake DisasterRumi KISHIDA\*, Keiko UCHIKATA\*, Chikako TAKAYANAGI\*  
and Youji YOSHIOKA\*

**Abstract:** This study aimed to elucidate nursing students' learnings from the experience of volunteer activity for mental health care at disaster recovery public housings, seven years after the Great East Japan Earthquake. The study targeted 12 nursing students who participated in the NPO volunteer tour for disaster-stricken areas in the Tohoku region. We collected data from a research survey using open-ended questions and analyzed the data using a qualitative data analysis method called Steps for Coding and Theorization (SCAT). The results indicated that learning aspects from the experience of volunteer activity for mental health care were "Learning from the relationship with residents at disaster recovery public housings," "Learning from the relationship with other volunteer staff," and "Inner change/growth." Mutual interaction and enhancement were observed in these aspects. Furthermore, while the students could expand their understanding of the disaster and disaster victims by visiting the devastated areas, the study confirmed the significance of prior learning regarding volunteer activity for mental health care.

**Keywords:** Great East Japan Earthquake disaster, Volunteer activities, Nursing student, Disaster recovery public housings

## 1. はじめに

東日本大震災（以下、震災と略記）から7年が経過した。国は復興の現状について、津波被災地域の生活インフラの復旧はほぼ終了したとし、住まいの再建についても、災害公営住宅が建設され仮設住宅からの移転が進められており、2020年度末までに仮設住宅全ての解消を目指すとしている（復興庁2018）[1]。しかし、こうした復興の進展に伴い、被災者は新たな問題に直面している。被災地のメンタルヘルスの実態に関する2015年度の調査において富田は、宮城県沿岸部の被災地域では、「震災後5年が過ぎ徐々に仮設住宅から災害公営住宅への移転が進んでいるが、移転にともなう不安を抱えておられる方は多く、経済的なこと、仮設住宅で構築した現状の人間関係を失うこと、移転先の既存のコミュニティの中での人間関係、周囲のコミュニティに入っていくことへの不安等があげられる。」（富田2017）[2]と述べ、「発災以降、時間の経過に従って、ストレスの内容は形を変えてさまざまな形で被災者のメンタルヘルスに影響を及ぼすことが示されてきている。」（富田2017）[2]としている。また、「時間の経過とともに、一般社会の東日本大震災への関心は薄らいでいくのに比して、当事者の方は周囲や社会と気持ちを共有しにくくもなっていく。」（富田2017）[2]とも述べている。

現状を受けて国は「心の復興」を被災者支援の重要な課題と位置づけ、被災者の心身のケアと孤立の防止、住宅・生活再建に関する相談支援、生きがいづくりのための事業、コミュニティ形成支援等を推進している（復興庁2018）[1]。また、ボランティア活動へのニーズも、がれきの撤去等から被災者の心身のケアやコミュニティ形成を促進するものに変化しており、傾聴ボランティアやサロン運営ボランティア等をNPO法人などが受け入れ活動している（復興庁2018）[3]。

このような被災地の実態があり、心のケアが大きな課題となっている現在、A大学の看護学生が、災害公営住宅において心のケアボランティア活動に参加する機会を得た。発端はNPO法人による、東北被災地ボランティアツアー（以下、ボランティアツアーと略記）参加者募集の呼びかけであった。このボランティアツアーは、NPO法人が大学生と共に、

東北被災地の視察と、宮城県の災害公営住宅において住民の「心の復興」を目指したボランティア活動を行うもので2017年より実施されている。このボランティアツアーに、18名の学生が参加を希望した。震災から7年という時間の経過から一般社会で見られる震災への関心の薄らぎは、A大学看護学部においても強く感じられるが、東北被災地での心のケアボランティア活動に参加した看護学生は、何を感じどのような学びを得たのだろうか。

ボランティア活動による学生への影響や学びについては、多くの先行研究がある。石田らは、震災後の2011～2012年にがれき処理や被災者との交流を行ったボランティア活動では、「①動機の充足や目標達成による自己実現 ②対人関係能力やコミュニケーション能力の向上 ③社会的承認欲求による自己有用感の向上」がみられたとしている（石田ら2013）[4]。川田らは、2015年に被災地のイベント参加による住民との交流を行い「自己肯定感がボランティア活動によって醸成された」（川田・志塚2016）[5]としており、ボランティア活動は、学生の内面の変化や成長に繋がるという知見が得られている。しかし、看護学生の災害公営住宅での心のケアボランティア活動における学びについての報告は見当たらないのが現状である。

そこで本研究では、震災7年後の災害公営住宅において、心のケアボランティア活動に参加した看護学生が、その活動から何を学ぶことができたのかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究目的

東日本大震災7年後の災害公営住宅における心のケアボランティア活動を通して得られる看護学生の学びを明らかにする。

## 3. 研究方法

### 1) 研究対象者

ボランティアツアーへ参加するA大学看護学部生18名に、研究協力依頼文書を配布し研究への参加者を募った。後日、参加希望者に対し説明会を行い研究目的や調査方法を説明した上で、研究への同意を得られた学生を対象とした。

### 2) データ収集方法

質問紙法による自由記述方式の調査を、ボラン

ティアツアー前に1回、ツアー中に2回の計3回、実施した。回答は無記名とし個人が特定されないようにした。

### (1) 調査内容

①調査A：ボランティアツアー出発前日に実施。質問紙には、参加動機、現在の思いなどを自由記述とした。

②調査B：ボランティアツアー1日目終了後に実施。質問紙には、1日目の活動を通して学んだこと、感じたこと、印象に残ったこと、現在の思いなどを自由記述とした。

③調査C：ボランティアツアー2日目終了後に実施。質問紙には、2日目の活動（午前は被災地視察、午後は心のケアボランティア）を通して学んだこと、感じたこと、印象に残ったこと、現在の思いなどを自由記述とした。

### (2) 調査期間

平成30年8月3日～平成30年8月5日

### 3) 分析方法

調査で得られた自由記述による回答を、大谷が提唱したSCAT(Steps for Coding and Theorization) (大谷 2007) [6] を用いて分析した。この手法は分析手続きが明示化され、小規模データにも適応可能な質的データ分析手法である。分析の具体的な手続きは以下の通りである。

1. マトリクスの中に、セグメント化したデータを記述し「テキスト」とし、それぞれの文脈を踏まえて「〈1〉テキスト中の注目すべき語句」を選択する。
2. 〈1〉について、「〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句」、「〈3〉〈2〉を説明するようなテキスト外の概念」、〈1〉～〈3〉から浮き上がる「〈4〉テーマ・構成概念」の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングを行う。
3. 「〈4〉テーマ・構成概念」を紡いで、ストーリーラインと理論を記述する。

本研究は小規模データであることと、分析手続きが明示化され分析過程の省察可能性および反証可能性が高いことから、この手法を選択した。また大谷は、「分析者が各自の必要に応じて、分析概念の階層を定義して呼び方を変え、それらを区別する工夫をすると良い」(大谷 2007) [6] とも述べており、

本研究においては、マトリクス中の「〈4〉テーマ・構成概念」をサブカテゴリーと呼ぶこととし、サブカテゴリーをもとに同質性に従い集合体を作りカテゴリーとして表示した。

なお分析過程においては、質的研究の見識者よりスーパーバイズを受け、共同研究者と検討を繰り返してデータ解釈の妥当性と分析の信頼性を確保した。

### 4) 倫理的配慮

対象者に対して研究の趣旨、匿名性の確保、プライバシーの保護、研究への自由な参加と途中辞退および中断の保証、またそのことによる不利益が生じないことを書面と口頭で説明し承諾を得ると共に、研究の公表についても承諾を得た。なお、本研究は東京情報大学倫理委員会の審査を経て承認（承認番号30-007）を受け、その内容を遵守し実施した。

## 4. ボランティアツアーの概要

### 1) 参加者の概要

ボランティアツアーはNPO法人Smile and Hopeが主催し、5つの大学から総勢約40名の学生が参加したものである。学生の所属学部は看護学部、医学部、薬学部、法学部等で、学年は1～6年次であった。また、他大学の学生の中には、このボランティアツアーに前年度も参加した学生が複数含まれていた。

### 2) スケジュール

スケジュールは表1の通りである。2018年8月4日と5日午前には被災地視察があり、5日午後には心のケアボランティア活動が行われた。

### 3) 被災地視察と心のケアボランティア活動

被災地視察の内容は表1のとおりである。被災当事者である語り部のガイドが付き、被災地の状況に加え、自身の震災前後の生活や思い、防災の重要性、震災遺構の保存等についての語りがなされた。特に被災現場の状況については、震災前後の写真を提示しながら、語り部の気概ある語りがあった。各所の慰霊碑においては全員で黙祷を捧げた。

心のケアボランティア活動は、宮城県本吉郡南三陸町B災害公営住宅の集会所を会場に、住民と学生の交流会という形で実施された。住民と学生及び住民同士のコミュニケーションを図り、災害公営住宅での孤立防止と孤独感軽減への支援及びコミュニティ形成支援を目的としていた。交流会では、学生によるハンドマッサージと足浴の実施、茶話会、



表1 ボランティアツアースケジュール

日 時	内 容
8月4日 15時～17時	被災地視察 ＊語り部（震災遺族）によるガイドあり ・宮城県石巻市南浜・門脇地区 津波高が16mにもおよび平野部の住宅は全壊、その後大規模火災が発生し壊滅的な被害を受けた。石巻南浜津波復興祈念公園としての整備が予定され造成工事が進められている。 ・旧石巻市立大川小学校（震災遺構） 旧大川小学校は海岸から3.8km内陸に位置していたが、北上川を遡上した大津波によって74名の児童と10名の職員が犠牲となった学校管理下における最大の災害。震災遺構となった。
夕食後	ハンドマッサージ講習会 心のケアボランティア活動で住民に実施するため、あん摩マッサージ指圧師による実技指導と学生同士の演習実施。
8月5日 9時～11時	被災地視察 ＊語り部（被災者）によるガイドあり ・宮城県本吉郡南三陸町旧防災庁舎 津波により鉄骨のみが残る。屋上のフェンスやアンテナにしがみつき一命を取り留めた職員がいる一方で、数十名の職員が津波に流され亡くなった。震災遺構とすることには賛否両論がある。 ・南三陸町立戸倉小学校旧校舎 津波により校舎全壊。児童達は教員の判断で近くの高台まで避難しており全員無事であった。視察時、旧校庭では仮設住宅の撤去が行われていた。
13時～16時	心のケアボランティア活動 南三陸町B災害公営住宅の集会所において住民の方々と学生の交流会開催 ・茶話会 ・学生による住民へのハンドマッサージ、足浴の実施 ・NPO法人医師による健康相談

NPO法人の医師による健康相談が行われた。また、B災害公営住宅自治会長の依頼で、集会所まで外出できない住民の個別訪問も行い、学生が2～3人1組になり独居高齢者宅を訪問して話を聴き交流を図った。

## 5. 結 果

### 1) 研究対象者の属性と参加動機

ボランティアツアーに参加したA大学の看護学生18名のうち、12名（男性5名、女性7名）から研究協力の同意を得た。全員2年生であった。また質問紙の回収数は、参加動機等に関する回答（調査A）は12件、1日目の活動に関する回答（調査B）は11件、2日目の活動に関する回答（調査C）は10件であった。

対象者の参加動機については、調査Aの回答内容を同質性によりカテゴリー化し、表2に示した。

### 2) 分析結果

調査B、CについてのSCATによるマトリクス（分析過程）を表3、4に示す。表3、4において被災

表2 参加動機

参加動機	参加動機の具体
震災と被災者への関心	実際に被災地を見たい
	被災者の話を聴きたい
	震災と復興の状況を知りたい
	7年経過し震災への関心の薄れを実感
	被災地の状況を周囲に伝えたい
	震災について知識不足
	被災地へ行ったことがない
心のケアボランティア活動への関心	興味本位だったが主催者との関りを通して関心が高まった
	被災者の心に寄り添ってケアしたい
	初めてで被災者への接し方が分からない
参加者との交流への関心	初めてでボランティア活動の内容が想像できない
	参加者との交流への期待
	他大学の学生との交流への不安

表3 被災地視察（調査B・C）についてのマトリクス

番号	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) 語句の言い換え	(3) 左を説明するような テキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念
1	7年経ち…忘れかけている 復興にはまだまだ程遠い 当時の建物を見たり話を聴くことが…大切 伝えていきたい	東日本大震災に対する関心の低下の実感 復興には時間がかかる被災地を自分の目で見ること 被災者から直接話を聴くことの重要性 被災地の状況を周囲に伝えたいという思い	一般社会の東日本大震災に対する関心の低下 まちの復興状況と取組み 被害の甚大さを目の当たりにする 当事者から話を聴くことの重要性 震災を語り継ぐことの重要性	復興には長期間を要する 被災地を自分で見ることの重要性 被災者から話を聴くことの重要性 震災を伝えることへの意欲
2	復興には時間がかかる 被災の大きさを思い知らされた	被災状況に衝撃を受ける 復興の現状と道のり	被害の甚大さを目の当たりにする まちの復興状況と取組み	甚大な被害 復興には長期間を要する 震災と復興への理解の深まり
3	言葉が出てこなかった 被災者はどうのような気持ちで逃げたのだろう 震災をこれからも伝えていくことが大切 災害の備えをしていくことも大切 心に寄り添い気持ちを理解しようとしていくことは重要だ	被災状況に衝撃を受ける 被災者の思いを想像する 震災を語り継ぐことの重要性 災害への備えの重要性 傾聴や共存 心のケアの重要性	被害の甚大さを目の当たりにする 震災の教訓の伝承 被災者のメンタルヘルス 心の復興	甚大な被害 被災者の心情への理解の深まり 震災の教訓を語り継ぐことの重要性 災害への備えの重要性 防災への理解の深まり 被災者の心のケアの重要性
4	津波の恐怖 住んでいた人の悲しみや苦しみが伝わって 私も小学生 寒さと恐怖に耐えられなかったに違いない 二度とこのようなことが起きてはいけな 津波は人々の命も建物もうばい…一番大切な人の心までもこわしていき恐ろしい残酷なもの 過去の恐怖が思い出され忘れることはない	被災状況の衝撃 被災者の思いを推察し自分と重ね合わせる 震災の教訓を忘れてはいけない 津波による喪失体験悲嘆 PTSD (心的外傷後ストレス障害) PTSR (心的外傷後ストレス反応)	被害の甚大さを目の当たりにする 被災者の悲嘆の大きさ 震災の教訓の伝承	津波の恐怖 甚大な被害 被災者の心の痛み 被災者の心情への理解の深まり
5	他人事だと思っはいけない 自分の身は自分で守る 今の生活が幸せでありがたいと感謝して生きたい 災害への備えが大切だ	災害はいつ起こるかかわからない 的確な避難行動 被災していない 自己の生活の再認識 災害への備えの重要性	各地で災害が発生 防災に関する個人の責務 災害により日常が一変する可能性 学生の内面の変化	災害への備えの重要性 的確な避難行動が命を守る 防災への理解の深まり 他人事ではない 日常への感謝
6	被災した人たちの心情 人々に伝える度に被災している 災害について知ってもらえればと思っ感謝	被災者の震災を伝えたいという思い 被災体験を思い出し伝えることの辛さ 伝えてくれたことへの感謝	語り部の方への感謝の思い 他者理解の深まり	被災者の心情への理解の深まり 語り部の思い 語り部への感謝
7	実際に現場に行ってみるといっことがとても大切 人に伝えていきたい人思い出したくない人 伝えていきたいと思っくれる方がいることに感謝	被災地を自分の目で見ること 被災者の震災を語り継ぎたいという思い 被災体験を話したくない又は思い出したくないという思い 伝えてくれたことへの感謝	被害の甚大さを目の当たりにする 語り部の方への感謝の思い 他者理解の深まり	甚大な被害 被災地を自分で見ることの重要性 被災者から話を聴くことの重要性 語り部の思い 語り部への感謝
8	実際見てみなければ分からないこと まだ復興していない所 テレビでは分からない…話が聞けて良かった その人達がどんな思いで…胸が苦しくなり言葉では簡単に表せない感情貴重な体験 感謝	被災地を自分の目で見ること 被災者から直接話を聴くことの重要性 復興には時間がかかる 被災者の心の痛みを想像し言葉にできないほどの衝撃を受ける メディアでは分からない	被害の甚大さを目の当たりにする 当事者から話を聴くことの重要性 まちの復興状況と取組み 被災者の悲嘆の大きさ 語り部の方への感謝の思い メディアの限界	甚大な被害 被災地を自分で見ることの重要性 被災者から話を聴くことの重要性 復興への理解の深まり 復興には長期間を要する 被災者の心の痛み 言葉にできない程の衝撃 語り部への感謝
9	建物を見ると津波の被害がどれだけ大きかったか身に染み 災害時に備えた行動を常に意識して対策を立て自分自身の身を守る行動が必要不可欠だ	被災状況に衝撃を受ける 災害への備えと的確な避難行動の重要性	被害の甚大さを目の当たりにする 体験 防災に関する個人の責務 震災の教訓の伝承	甚大な被害 的確な避難行動が命を守る 防災への理解の深まり
10	ここで何人も命が奪われた 被災した人達の気持ちを思うと言葉にできない思いがこみあげて 語り部の伝えたいという思いが伝わり	被災状況に衝撃を受ける 被災者の心の痛みを想像し言葉にできないほどの衝撃を受ける 辛い体験を思い出し伝えてくれたことへの感謝	被害の甚大さを目の当たりにする 体験 被災者の心の傷の大きさ 語り部の方への感謝の思い	甚大な被害 命の尊さ 被災者の心の痛み 言葉にできない程の衝撃 語り部の思い
11	全員無事に…避難できた 高齢の方々…昔の知恵 冷静な判断と行動がとても大切だ	津波から避難できた 高齢者が持つ知恵の重要性 的確な避難行動	震災の教訓の伝承 災害への備え	的確な避難行動が命を守る 防災への理解の深まり
12	写真を見せてもらいながら説明を聞いた 想像することができた 想像していた津波を超え 建物を残すことはいろいろな意見に分かれる 建物を残し3月11日のことを忘れないでほしい	被災前後の写真により被害の大きさを実感した 震災前の生活 被災状況に衝撃を受ける 震災遺構に抱く思いの相違 震災を記憶に留める	被害の甚大さを目の当たりにする 体験 震災遺構が津波の恐怖などを想起させる 一方では震災の教訓を語り継ぐ場となる 震災遺構保存の意義	震災への理解の深まり 甚大な被害 震災遺構の保存 震災の教訓を語り継ぐことの重要性

表4 心のケアボランティア活動（調査C）についてのマトリクス

番号	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) 語句の言いかえ	(3) 左を説明するような テキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念
1	来てよかった 話を聞き寄り添うことが大切 独居 嬉しいような何か寂しいようなものを感じ また来てねと言われた 次も参加したい	充実感 傾聴 共存 複雑な感情の体験 もっと住民と関わりたいという思い 住民の孤独感 再会を願う思い ボランティア活動継続への意欲	災害公営住宅の独居高齢者の孤立と孤独感 他者との交流を待ち望む独居高齢者の思い 心のケアボランティア活動の意義と継続の意欲	達成感 災害公営住宅の独居高齢者の孤立と孤独感 傾聴と共存の大切さ 心のケアボランティア活動継続の意義 心のケアボランティア活動継続への意欲
2	メディアから…得ることができなかった情報 ボランティア活動を通じて得る 参加した者の責任 被災地の情報を伝えていかなければ 行動に移して 貴重な体験ができ感謝	被災者の話を実際に聴かなければ得られない情報 語り継がなければいけない情報 責任感 使命感 意義ある活動に参加	現地でしか得られない情報 メディアの限界 震災を広く社会に伝えることの重要性 心のケアボランティア活動で得た使命感	震災への関心が薄れている社会 震災情報の減少 災害公営住宅の独居高齢者の孤立と孤独感 責任感 震災を広く社会に伝えることへの使命感 達成感
3	マッサージと共にコミュニケーション たくさん話を聞き 笑顔を見る 元気をもらう 心が温かく	非言語的コミュニケーション 傾聴 喜び 自分が元気付けられる体験	コミュニケーションの相互作用 心のケアボランティア活動の意義	非言語的コミュニケーションの効果 他者との交流が喜びを生み出す 住民から自分も元気をもらっている コミュニケーションの相互作用
4	笑顔で学生と触れ合い楽しんでいる 家や家族を失った方々…リアルな話を聴いて 真剣に向き合って寄り添って 心の復興 人々との関りが大切 お互いに支え合うことの大切さ	交流を楽しむ 被災者の心の痛み 真摯な態度 傾聴 共存 心のケアの重要性 ボランティア活動の大切さ	他者との交流の喜び 被災者の喪失体験による心の痛み	他者との交流が喜びを生み出す 被災者の喪失体験による心の痛み 思いを吐露することによる癒し 傾聴と共存の大切さ 心のケアボランティア活動の重要性
5	高齢のかた…私たちに教えるような語り口調の先生みただった 震災がどういった影響をもたらしたか どういう目にあったか	高齢者の論すような口調 分かってほしいという思い 震災の影響 心の痛み	被災者の喪失体験による心の痛み 震災後の生活	被災者の喪失体験による心の痛み 被災の実態を伝えたいという思い
6	高齢の方…また会えたありがたいと言って 来年も参加したい 他大学のみなさんが素晴らしい人…良い関係が築け…うれしかった	高齢者の孤独感 再会の喜び ボランティア活動継続への意欲 他大学の学生との信頼関係の築き	災害公営住宅の高齢者の孤立と孤独感 学生との再会を待ち望む独居高齢者の思い	心のケアボランティア活動継続の意義 ボランティア活動継続への意欲 他大学の学生との信頼関係 達成感
7	今は来る人もなく話す人もいない話を聴くことが大事だ その人はとても喜んで	住民の孤独感 傾聴 共存 喜び	災害公営住宅の住民の孤立と孤独感 コミュニケーションの相互作用	災害公営住宅の住民の孤立と孤独感 傾聴と共存の大切さ 他者との交流が喜びを生み出す
8	また会えてうれしい また来てね 継続して訪問していくことが重要 来年も来たい	再会の喜び 再会を望む住民の思い ボランティア活動継続への意欲	心のケアボランティア活動継続の意義 災害公営住宅の住民の孤立と孤独感 他者との交流を待ち望む住民の思い	他者との交流が喜びを生み出す 心のケアボランティア活動継続の意義 心のケアボランティア活動継続への意欲
9	孫によくやってもらった マッサージしてもらうととてもうれしい 看護学生だからこそできた マッサージ…身体的精神的にリラクゼーションを提供できた あいづちや同調…看護的コミュニケーションの実施…自分から沢山のことを語っていただけ…すっきりした表情を浮かべありがたいと言っていた 学生同士で問題が生じた リーダー相談 話し合い 一人一人の気持ちを理解し尊重し…納得できるようにまとめ 成功に結び付いた	震災前の思い出 孤独感 非言語的コミュニケーション 喜び 傾聴 共存 看護学生だからできたケア 達成感 メンバー間の問題話し合いによる解決 リーダーシップ・メンバーシップ チームワーク 信頼感 責任感	災害公営住宅の高齢者の孤立と孤独感 看護学生という自覚 チームワーク ボランティア活動をチームで行うことで自らの成長につながっている	コミュニケーションの実践 傾聴と共存の大切さ 非言語的コミュニケーションの効果 他者との交流が喜びを生み出す コミュニケーションの相互作用 達成感 責任感 ボランティア活動の仲間との関りから得た学び リーダーシップ・メンバーシップ チームワーク 自己の成長の実感
10	団地の中のお宅を訪問 足が痛くて外になかなか出られない 独居のおばあちゃん こんなところで悪いねえ…家の中に入れてくれ マッサージをしながら話を聴いた喜んで 話を聴くことが大切 訪問して本当に良かった 気力が下がっているような感じも受け心配な気がした	外出困難 独居高齢者 個別訪問 孤立 孤独感 傾聴 共存 非言語的コミュニケーション 喜び 達成感 住民のメンタルヘルスを気遣う	災害公営住宅の独居高齢者の孤立と孤独感 心のケアの重要性 家庭訪問による見守り 心のケアボランティア活動の達成感	災害公営住宅の独居高齢者の孤立と孤独感 他者との交流が喜びを生み出す 心のケアボランティア活動の達成感 コミュニケーションの実践 傾聴と共存の大切さ 住民のメンタルヘルスへの気遣い 個別訪問の重要性



地視察及び心のケアボランティア活動について抽出された「〈4〉テーマ・構成概念」を、同質性によりカテゴリー化した結果が、表5、6である。以下、データ分析結果について、表5、6に基づき記述する（カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〔 〕で囲んで示す、テキストは斜体で示す）。

### （1）被災地視察による学び

被災地視察は、表5にあるように【震災への理解の深まり】【被災者の心情への理解の深まり】【まちの復興と防災への理解の深まり】【学生の内面の変化と気付き】の4つのカテゴリーで構成されていた。

【震災への理解の深まり】には〔甚大な被害〕と〔津波の恐怖〕が含まれていた。被災地視察において学生は震災遺構等を訪ね実際に被災地を見て、さらに語り部から被災状況や震災前後の写真の説明を受けたことにより、〔甚大な被害〕と〔津波の恐怖〕を実感し震災への理解を深めた。

- ・一番印象に残ったのは、大川小学校を視察したことだ。建物を見ると津波の被害がどれだけ大き

かったか、戦争のあのような状態だと思った。学校だと思わないほど壊れ、崩れ、驚いた。

- ・津波は想像もできないくらい恐ろしいものだと鳥肌が立った。
- ・写真を見せてもらいながら説明を聞いたことにより、その時のことを想像することができた。
- ・震災前の住宅がたくさん並んでいる写真と、震災直後の写真を見たときは、津波の恐怖と、ここに住んできた人の悲しみや苦しみが伝わってきた。

【被災者の心情への理解の深まり】には〔被災者の心の痛み〕〔言葉にできない程の衝撃〕が含まれていた。学生は被災地を見て語り部の話を聴き、〔被災者の心の痛み〕を想像し〔言葉にできないほどの衝撃〕を受けた。

- ・今日被災地を実際に目で見て、感じて、言葉が出てこなかった。写真や動画では見ていたが、実際に被災地に行くと、「被災者はどのような気持ちで逃げていたのだろう」「亡くなった方は最期に何を思っていたか」など考えさせられた。

【まちの復興と防災への理解の深まり】には〔復興には長期間を要する〕〔災害の備えの重要性〕〔的確な避難行動が命を守る〕〔震災の教訓を語り継ぐことの重要性〕〔震災遺構の保存〕が含まれていた。復興について学生は、被災地視察により現在も随所で復興工事が行われている様子を目にし〔復興には長期間を要する〕ことへの理解を深めた。

- ・復興にはまだまだ程遠い地域が沢山ある。復興には時間がかかることを実感した。

防災については語り部の話から、〔的確な避難行動が命を守る〕ことや、普段からの〔災害の備えの重要性〕を理解した。また震災遺構の視察により、津波被害の教訓をこれからの防災に活かし同じような過ちを二度と繰り返してはいけないという実感を持ち、〔震災の教訓を語り継ぐことの重要性〕への理解を深めた。〔震災遺構の保存〕については、その役割と共に遺族や地域の住民には賛否両論があることについて理解した。

- ・全員無事に避難できたことを聞くことができた。冷静な判断と行動がとても大切だと分かった。
- ・大きな被害をもたらしたこの震災をこれからも伝えていくことが大切であり、二度と大川小学校のような悲劇を起こさないよう災害の備えをしてい

表5 被災地視察の「テーマ・構成概念」

カテゴリー	サブカテゴリー
震災への理解の深まり	甚大な被害
	津波の恐怖
被災者の心情への理解の深まり	被災者の心の痛み
	言葉にできない程の衝撃
まちの復興と防災への理解の深まり	復興には長期間を要する
	震災遺構の保存
	震災の教訓を語り継ぐことの重要性
	災害への備えの重要性
	的確な避難行動が命を守る
学生の内面の変化と気付き	語り部の思い
	語り部への感謝
	命の尊さ
	震災は他人事ではない
	日常への感謝
	被災者の心のケアの重要性
	被災地を自分で見ることの重要性
	被災者から話を聴くことの重要性
	震災を伝えることへの意欲

くことも大切だと思った。

- ・災害時に備えた行動を常に意識して対策を立て、安全な避難場所を知っておくことがとても大切だと感じた。また、自分自身の身を守る行動が必要不可欠だということを学んだ。
- ・震災遺構として建物を残すことはいろいろな意見に分かれるが、建物を残して、津波を経験していない人が、見て感じて3月11日のことを忘れないでほしいと思った。

【学生の内面の変化と気付き】には、[語り部の思い][語り部への感謝][命の尊さ][震災は他人事ではない][日常への感謝][被災者への心のケアの重要性][被災地を自分で見ることの重要性][被災者から話を聴くことの重要性][震災を伝えることへの意欲]が含まれていた。

学生は語り部の話を聴き、震災で家族や家を失った被災者であり被災体験を思い出すことは辛いことだがそれでも学生に伝えたいという[語り部の思い]に気付き、[語り部への感謝]の念が生じていた。

- ・語り部の方は、人々に伝える度に被災していると言う人もいます。震災を思い出してしまうけど、それでも学生に災害について知ってもらえればと思っていて感謝した。
- ・被災者の方の中には、人に伝えていきたい人と、思い出したくない人などいろいろな人がいます。伝えていきたいと思ってくれる方がいることに感謝だと思った。

学生は震災遺構に立ち、そこで多くの方が亡くなった被害の甚大さを理解した。これは[命の尊さ]を学生に実感させ、命があり幸せな日常がいつ災害によって一変するか分からない[震災は他人事ではない]という気付きと[日常への感謝]を生じさせた。

- ・震災は非現実的、他人事だと思ってはいけな。それが第一に思ったことだった。東日本大震災は多くの命を奪った。……今の生活が幸せでありがたいと感謝して生きたい。

また被災地視察により、学生は[被災者への心のケアの重要性][被災地を自分で見ることの重要性][被災者から話を聴くことの重要性]に気付くことが出来た。また、被災地視察で得た情報を周囲の人に伝えたいという[震災を伝えることへの意欲]が

芽生えていた。

- ・実際に被災した方の気持ちを完全に理解することは出来ないけど、心に寄り添い気持ちを理解しようとしていくことが重要だと思う。
- ・予想もしていなかった大津波は、人々の命も建物もうばい、そして一番大切な人の心までもこわしていき、とても恐ろしい残酷なものだと強く感じた。そしてそれは、簡単に戻ることはなく、きっと戻ったとしてもどこかで過去の恐怖が思い出され忘れることはない。
- ・本当に来てよかった。観光ではこのような体験は出来ない。
- ・7年経ち当時のことを忘れかけている今、当時の建物を見たり話を聴くことが出来ることは大切だ。
- ・この機会を生かし、学生や友達、家族に伝えていきたい。

以上の結果をまとめると、被災地視察には【震災への理解の深まり】【被災者の心情への理解の深まり】【まちの復興と防災への理解の深まり】という学びと、それらの学びから生じた【学生の内面の変化と気付き】が確認された。

## (2) 心のケアボランティア活動による学び

心のケアボランティア活動は、表6にあるように【災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び】【ボランティア活動の仲間との関りから得た学び】【学生の内面の変化と気付き】の3つのカテゴリーで構成されていた。

【災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び】には、[住民とのコミュニケーションの実践][傾聴と共存の大切さ][思いを吐露することによる癒し][非言語的コミュニケーションの効果][住民の喪失体験による心の痛み][被災の実態を伝えたいという思い][独居高齢者の孤立と孤独感][他者との交流が住民の喜びを生み出す][住民から自分も元気をもらっている][コミュニケーションの相互作用]が含まれていた。

心のケアボランティア活動において学生は、住民の話を傾聴し寄り添う[コミュニケーションの実践]を行い[傾聴と共存の大切さ]を理解した。このコミュニケーションにより、[思いを吐露することによる癒し]を住民が感じていることを、その表情や言葉から学生は実感することができた。また



表6 心のケアボランティア活動の「テーマ・構成概念」

カテゴリー	サブカテゴリー
災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び	住民とのコミュニケーションの実践
	傾聴と共存の大切さ
	思いを吐露することによる癒し
	非言語的コミュニケーションの効果
	住民の喪失体験による心の痛み
	被災の実態を伝えたいという思い
	独居高齢者の孤立と孤独感
	他者との交流が住民の喜びを生み出す
	住民から自分も元気をもらっている
コミュニケーションの相互作用	
ボランティア活動の仲間との関りから得た学び	他大学の学生との信頼関係
	リーダーシップ・メンバーシップ
	チームワーク
学生の内面の変化と気付き	心のケアボランティア活動の重要性
	心のケアボランティア活動継続の意義
	心のケアボランティア活動継続の意欲
	達成感
	責任感
	自己の成長の実感
	個別訪問の重要性
	住民のメンタルヘルスへの気遣い
	震災への関心が薄れている社会
	震災情報の減少
	震災を広く社会に伝えることへの使命感

ハンドマッサージによる「非言語的コミュニケーションの効果」も認識していた。

- ・話を聴くことが大事だと思った。ただ聴くだけだったがその人はとても喜んでくれた。マッサージをしながらリラクゼーションを行い、それもよかったと思う。
- ・住民の方々とたくさんいろいろな話をすることができ、来てよかったと思った。話を聴き寄り添うことが大切なのだと感じた。
- ・あいづちや同調といった看護的コミュニケーションの実施ができた。その方は、話していくうちに自分から沢山のことを語っていただけるようにな

り、最後には少しすっきりした表情を浮かべありがとうございました。

- ・マッサージにより、身体的、精神的にリラクゼーションを提供できたのではないかと感じました。

また学生は住民とのコミュニケーションにより、災害公営住宅には多くの独居高齢者が居り、震災により家も家族も失い「今は来る人もなく話す人もいない」と語る高齢者の思いに触れ、「住民の喪失体験による心の痛み」[被災の実態を伝えたいという思い][独居高齢者の孤立と孤独感]を認識し災害公営住宅の住民への理解を深めた。この住民たちが交流を楽しみ笑顔を見せる様子から、心のケアボランティア活動による「他者との交流が住民の喜びを生み出す」ことを理解した。また、学生は「住民から自分も元気をもらっている」ことを実感し、「コミュニケーションの相互作用」への理解を深めた。

- ・1年目は(ボランティアなど)たくさん県外からも人が来た。今は来る人もなく、話す人もいないと話していた。
- ・わずかな時間でも、その人たちは、私たちに、震災がどういった影響をもたらしたか、どういう目にあったかを伝えてくれた。
- ・団地で肩をもむととても喜んでくれた。孫によくやってもらったけど、今はもう津波でいなくなった。だからこうしてマッサージしてもらおうと、とてもうれしい気持ちになると言ってくれた。
- ・復興住宅の方々にお越しいただき、マッサージと共にコミュニケーションを取りたくさん話を聞いた。笑顔を見ることができ、学生も元気をもらうことができ、心が温かくなった。

【ボランティア活動の仲間との関りから得た学び】には「他大学の学生との信頼関係」「リーダーシップ・メンバーシップ」「チームワーク」が含まれていた。

心のケアボランティア活動において学生は「リーダーシップ・メンバーシップ」を自覚して活動し、学生間に「チームワーク」が生まれていた。また、このボランティアツアーには複数の大学の学生が参加しており学部も学年も様々であったが、「他大学の学生との信頼関係」が築かれていたことも分かった。

- ・学生同士で問題が生じた際、リーダーの自分に

相談の声が次々あがった。リーダーとして解決のため学生に集まってもらい残りの活動の成功に向けて話し合った。一人一人の気持ちを理解し考え方を尊重し、みんなが納得できるようにまとめた。

- ・(他大学の) みなさんがすばらしい人で、自分たちとよい関係が築けたことがうれしかった。

【学生の内面の変化と気付き】には、[達成感][心のケアボランティア活動の重要性][心のケアボランティア活動継続の意義][心のケアボランティア活動継続の意欲][責任感][自己の成長の実感][個別訪問の重要性][住民のメンタルヘルスへの気遣い][震災への関心が薄れている社会][震災情報の減少][震災を広く社会に伝えることへの使命感]が含まれていた。

学生は心のケアボランティア活動において、「貴重な体験」「来てよかった」「コミュニケーションが実施できた」「訪問して本当に良かった」等の[達成感]を得ていたことが分かった。また[災害公営住宅の住民の孤立と孤独感]への理解の深まりから[心のケアボランティア活動の重要性]や[心のケアボランティア活動継続の意義]に気付き、[心のケアボランティア活動継続の意欲]も生じていた。リーダーを任された学生には[達成感][責任感][自己の成長の実感]がみられた。

- ・これから先、心の復興もされていくよう、たくさんの人々との関りが大切だと感じました。
- ・最後に独居のおばあちゃんに「また来てね」と言われた際には、また次も参加したいと思った。
- ・一度きりの訪問ではなく、継続して訪問していくことが重要と分かった。ぜひ来年も来たい。
- ・リーダーとして……みんなが納得出来るようにまとめ……活動の成功に結びついたと考える。

体調不良により外出ができない独居高齢者宅を訪問した学生には、[個別訪問の重要性]への気付きと、[住民のメンタルヘルスへの気遣い]がみられた。

- ・足が痛み外になかなか出られないという独居のおばあちゃん宅を訪問した。カーテンを閉め昼間なのに暗く、ハエが2、3匹飛んでいた。「こんなところで悪いねえ」と家の中に入れてくれた。中でマッサージをしながら話を聞いた。とても喜んでくれた。話を聴くことが大切だと感じた。暗い

家の中にいつも一人でいるのかなと思った。訪問して本当に良かったと思った。気力が下がっているような感じも受け心配な気がした。

また、心のケアボランティア活動に参加し災害公営住宅の住民の現状を知った者としての[責任感]を感じた学生は、マスメディアからの[震災情報の減少]により[震災への関心が薄れている社会]に対し、[震災を広く社会に伝えることへの使命感]を感じていた。

- ・メディアからの情報だけでは得ることができなかった情報を、今日のボランティア活動を通じて得ることができた。参加した者の責任として、被災地の情報を伝えていかなければならないという気持ちが生まれた。今すぐ行動に移したい。

以上の結果をまとめると、心のケアボランティア活動には【災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び】と【ボランティア活動の仲間との関りから得た学び】が確認され、それらの学びから生じた【学生の内面の変化と気付き】がみられた。

## 6. 考 察

本研究において、心のケアボランティア活動による学生の学びが明らかとなった。ここでは、まず被災地視察による学び及び内面の変化と気付きについて、要因と心のケアボランティア活動への影響を述べ、次に心のケアボランティア活動について学びの要因及び学生の内面の変化と成長について考察する。最後に、心のケアボランティア活動による学生の学びと内面の変化・成長の関係性について仮説を提示する。

### 1) 被災地視察による学び

学生の参加動機からは、震災について知識不足を実感する学生や被災地を初めて訪れる学生が含まれることが分かったが、この学生たちが被災地視察により学びを深め内面に変化が生じたのは何故か。まず一つの要因は、「震災遺構を見ること」ができた点にある。結果からは、震災遺構の凄惨な被害の実態を目の当たりにしたことにより学生が「津波の恐怖」や「甚大な被害」への理解を深め、それに加え被災者の心情や防災への理解を深めたことが明らかとなった。学生は「被災地を自分で見ることの重要性」も感じており、これらは震災遺構の視察が

学生の学びを深める要因となっていたことを示している。

二つめは、「語り部の話を聴くこと」ができた点である。震災から7年が経過し、被災地の多くは復旧・復興の進展により震災直後の様相を全く留めてはいない。津波浸水区域はかさ上げ工事や防潮堤建設が至るところで進められ工事現場のようであり、初めて訪れた学生には、そこが被災地であることも津波被害の実態も、見ただけで理解することは極めて困難である。しかし結果からは、語り部が震災前後の写真を用いて人々の生活や被災状況、復興や防災等について説明したことで【震災への理解の深まり】【まちの復興と防災への理解の深まり】【被災者の心情への理解の深まり】が得られたことが明らかとなった。震災遺構においても語り部の説明により理解が深まったことが結果に示され、これらは「語り部の話を聴く」ことが学生の学びを深める要因であったことを示している。

また、【学生の内面の変化と気付き】には「語り部への感謝」の念が生じたとある。これは学生にとって「語り部の思い」を聴くことが、被災者である語り部の心の痛みや多様な価値観に触れる体験となっており、語り部への理解が深まったことで感じ得た思いと捉えることができる。「語り部の話を聴くこと」により、学生は震災や防災への理解を深めただけでなく被災者の多様な心情に直接接触する体験を得て、被災者への理解を深めることができたと考えられる。

阿部は、発災以降継続した震災ボランティア活動を行ってきた被災地の大学においても、震災からの時間の経過によりボランティアに参加する学生の意識は変容しており、ボランティア活動を行う際には津波被害を受けた場所（震災遺構）の見学や、震災当時の様子、復旧・復興過程、被災者の震災前後の生活についての「事前学習が必要である」と述べている（阿部 2017）[7]。ここまで述べてきた本研究の被災地視察の内容や学びは、阿部による事前学習の内容と一致しており、それに加え「被災者の心のケアの重要性」への気付きもみられた。以上のことから本研究の被災地視察は、学生が心のケアボランティア活動に参加する際の事前学習としての効果を持つことが確認できたと考える。

## 2) 心のケアボランティア活動による学び

学生の参加動機には「初めてで被災者との接し方が分からない」「初めてで活動内容が想像できない」という不安が挙げられていたが、学生は【災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び】として、[住民の喪失体験による心の痛み][独居高齢者の孤立と孤独感][他者との交流が喜びを生み出す]等、住民の実情について理解を深めたことが明らかとなった。学生が住民とのコミュニケーションを実践し学び得た要因は何か。まず一つには、6.1)で述べた被災地視察による効果が挙げられる。被災地視察による学びが学生のベースにあったことが、[傾聴と共存の大切さ]の理解や[コミュニケーションの実践]を学生に促し学びを深める要因になっていたと考える。

二つめは、住民とのコミュニケーションにハンドマッサージが用いられた点である。学生の学びにはハンドマッサージによる「非言語的コミュニケーションの効果」とあり、心理的なリラクゼーション効果が住民に見られたことが分かる。それに加えて、ハンドマッサージには受け手と施術者の心理的距離を近付ける効果もある（山田ら 2017）[8]ことから、学生にとっては初対面の住民とのきっかけ作りや、傾聴と共存の一助にもなっていたと考えられる。事前にハンドマッサージ講習を受けたことも、学生の不安を軽減する効果があったと推察される。

三つめの要因として、ボランティア活動の仲間との関りが挙げられる。仲間との関りによる学びには「他大学の学生との信頼関係」「チームワーク」があるが、信頼関係やチームワークの構築には、学生同士がコミュニケーションにより感情や意思を理解し合い互いに受け容れることや、心のケアボランティア活動に関する綿密な情報交換が必要であったと考える。学生はこのような仲間との関りによって不安が軽減されたり、心のケアボランティア活動への意欲やコミュニケーションスキルを高めることが出来たと推察される。

## 3) 心のケアボランティア活動による学生の内面の変化と成長

住民とのコミュニケーションにおいて学生は、住民が交流を喜び感謝の思いを口にする様子から、自分が住民の役に立てたという「達成感」を得ていた。



「看護的コミュニケーションを実施できた」と記述した学生は、[コミュニケーションの実践]に看護学生としての成長の実感も得ていたと考える。住民から再訪を願う言葉を受けた学生には、次回も参加したいという[心のケアボランティア活動継続の意欲]と、心の復興にはこれからも継続した支援が必要であるという[心のケアボランティア活動継続の意義]への気付きが確認できた。

また、学生が独居高齢者宅を訪問したケースでは[住民のメンタルヘルスへの気遣い]が生じていた。これは住民の生活環境を直視したことによる[独居高齢者の孤立と孤独感]への理解の深まりと、生活環境が心身の健康に大きく影響するという看護の視点からの気付きと捉えることができる。この経験によって学生は、外出困難な独居高齢者への[個別訪問の重要性]に気付き、訪問し住民の役に立てたことへの[達成感]を得ていた。個別訪問は大学で学んだ知識と実践を結びつける経験となり、看護学生としての成長の実感にも繋がっていたと考える。

心のケアボランティア活動の仲間との関りにおいては、[他大学の学生との信頼関係][チームワーク][リーダーシップ・メンバーシップ]を学び、学生に[責任感]と[達成感]が生じていた。学生は他大学の学生とのコミュニケーションにより信頼関係を構築する過程で、多様な価値観への気付きや理解を深めることができたと考える。リーダーとなった学生には「自分がまとめなければ」という役割意識と、活動を成功させなければいけないという思いからの[責任感]、役割を遂行し成功させたという[達成感]が見られた。またリーダーとしての[自己の成長の実感]も得ており、心のケアボランティア活動が住民のためのみならず自分の成長に繋がる活動であると、その意味を捉えていたことが推察できる。

川田らは自己肯定感を構成する要素として、「達成感」「成長の実感」「多様な価値観への気付き」「他者からの承認と信頼関係」「責任感」等を挙げ、ボランティア活動によるこれらの経験によって「自己肯定感が醸成される」と述べている(川田ら 2016) [5]。ここまで述べてきたように、本研究においても学生はこれらの経験を得ていることが明らかとなり、川田らの研究知見と同様に心のケアボランティア活動においても自己肯定感が醸成されたことが確

認できた。

学生の中には、マスメディアからの[震災情報の減少]や[震災への関心が薄れている社会]に問題意識を持ち、社会と災害公営住宅の住民との隔たりに気付いた者も見られた。災害公営住宅入居は住まいの復興という面では一つのゴールであり、実情を知らない者にとってはそこに問題があるとは考えにくい。しかし学生は、心のケアボランティア活動により孤立している住民の実情を直視し、あたかも復興が完了したかのように情報が減少し関心が薄れていく社会に対し問題意識を持ち、[震災を社会に伝えることへの使命感]に駆り立てられた。これは心のケアが必要な住民に対し、被災地から離れて生活している自分に出来る支援は何かを考えた結果の強い思いと捉えることができる。震災7年後だから得ることができた学びと学生の成長といえるのではなからうか。災害公営住宅での心のケアボランティア活動による学びは、このように学生の行動変容を起こすきっかけともなったと考える。

#### 4) 心のケアボランティア活動における学びと内面の変化・成長の関係

心のケアボランティア活動による学びと学生の内面の変化・成長について考察してきたが、それらの関係性についての仮説を図1に示す。

学生は心のケアボランティア活動において住民との関りを経験し、実践の中から学びを得た。その学びは学生の内面に影響を与え達成感等を生じさせた。また、ボランティア活動の仲間との関りにおいても学びを得、それは学生の内面に責任感や他者理解の深まり等を生じさせた。これらの内面の変化・成長はボランティア活動の中で実践に反映され、ボランティア活動の質を向上させたり、学生の新たな学びの獲得に繋がっていったと考えられる。このように「災害公営住宅の住民とのコミュニケーションから得た学び」「ボランティア活動の仲間との関りから得た学び」「学生の内面の変化・成長」の3者は相互に作用し合い、心のケアボランティア活動を通してそれぞれを高め合う関係にあったと考えられる。図1には、以上に6.1)で述べた事前学習としての被災地視察による学びを加え、心のケアボランティア活動における学びの関係性の仮説とし提示した。

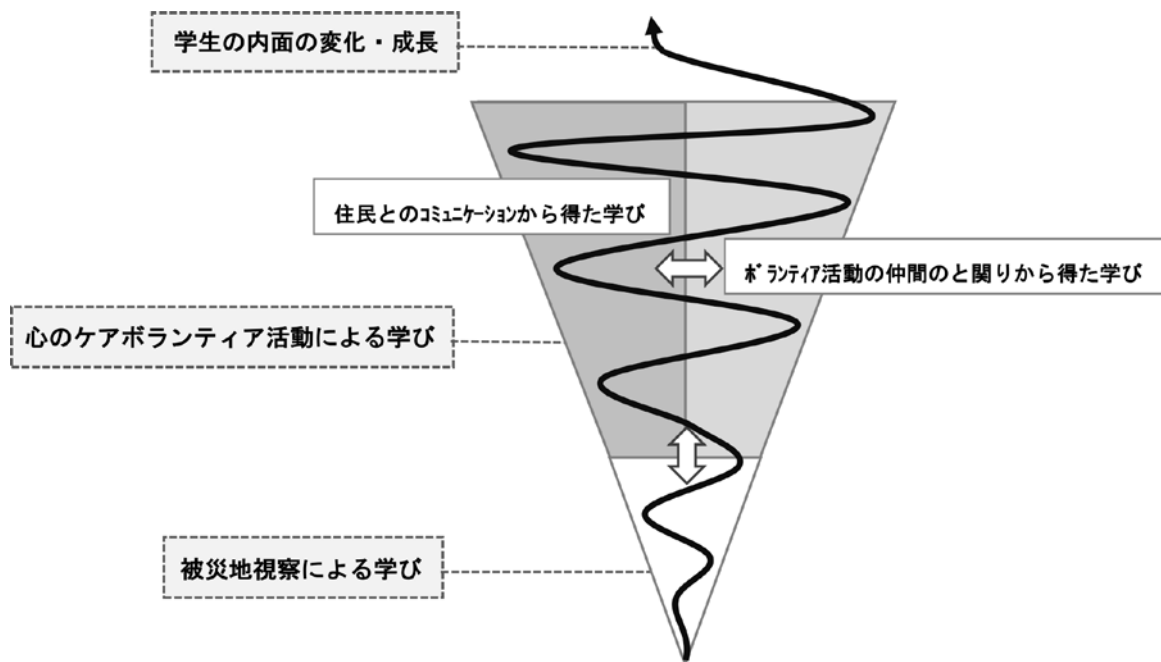


図1 心のケアボランティア活動における学生の学びと内面の変化・成長の関係

## 7. 結 論

東日本大震災7年後の災害公営住宅における心のケアボランティア活動から得られた看護学生の学びには、「災害公営住宅の住民との関わりから得た学び」と「ボランティア活動の仲間との関りから得た学び」が認められ、その学びにより、学生には「内面の変化・成長」がみられることがわかった。また、この3者には相互作用、相互促進がみられると考えられた。事前に行われた被災地視察による影響として、心のケアボランティア活動の事前学習としての効果が確認された。

## 8. おわりに

本研究は、NPO法人が主催するボランティアツアーに参加した学生を対象に行われ、学生は学び成長していることが明らかとなった。災害ボランティア活動については、大学のボランティアセンターが主催する場合や、授業の一環として行われるもの、今回のように外部団体の主催で行われるもの、また、個人で直接被災地へ行く方法等がある。学生がボランティア活動に参加する上で問題となる参加費用については、大学が主催する場合以外は、学生に経済的な負担がかかることが多い。今回のボランティアツアーにおいては、NPO法人が学生の参加

費用を低価格に設定しており、学生からはとても有難いという声が聞かれていた。今後ボランティア活動を継続するにあたっては、この費用をどうするかは課題である。学生が学びを深めるこの貴重な機会をどうしたら継続、発展させていけるかを、今後学生とともに考えていきたい。

## 謝辞

東北被災地ボランティアツアーを主催し学生を参加させてくださいましたNPO法人Smile and Hopeの関係者の皆様、震災について教えてくださいました語り部の皆様、交流会で学生を温かく迎えてくださいました南三陸町の住民の皆様深くお礼申し上げます。一日も早い復旧、復興を心よりお祈り申し上げます。

## 利益相反

利益相反なし

## 【引用文献】

- [1] 復興庁, 「復興の現状と課題 平成30年11月」, <https://www.reconstruction.go.jp> (2018年12月12日閲覧)
- [2] 富田博秋「東日本大震災から5年～こころの復興, こころの防災の現在と未来～」, *トラウマティック・ストレス*, 15(1), pp.3-16, (2017)
- [3] 復興庁, 「ボランティア活動をお考えの皆さまへ」,

[https://www.reconstruction.go.jp/topics/post\\_74.html](https://www.reconstruction.go.jp/topics/post_74.html)  
(2018年12月12日閲覧)

- [4] 石田易司・谷内祐仁・脇坂博史・福山正和「学生の災害ボランティア活動と教育効果」, 桃山学院大学社会学論集, 47(1), pp.61-86, (2013)
- [5] 川田虎男・志塚昌紀「ボランティア活動が学生の自己肯定感に及ぼす影響: 大学生ボランティアのヒアリング調査より」, 聖学院大学総合研究所紀要, 61, pp.89-123, (2016)
- [6] 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54(2), pp.27-44, (2007)
- [7] 阿部利江「東日本大震災における学生ボランティアの学びと体験—A市への訪問を通して—」, 感性福祉研究所年報, 18, pp.227-239, (2017)
- [8] 山田正実・片平伸子・飯吉令枝・内藤みほ・石岡幸恵・高島葉子・岡村典子「看護学生が行う災害ボランティア活動のための〈ハンドマッサージ研修〉の効果と課題—学生がコミュニケーションをとりながらハンドマッサージを相互に提供し合う体験からの気づき—」, 新潟県立看護大学紀要, 6, pp.1-8, (2017)
7. 川田虎男「震災復興期における学生ボランティアの学びと役割: 復興支援ボランティアスタディツアーの取り組みから」, 聖学院大学論叢, 30(2), pp.151-170, (2018)

#### 【参考文献】

1. 橋本佐由里・眞崎由香・樋口倫子「宮城県亘理郡山元町における被災者へのこころの支援活動」, 日本保健医療行動科学学会雑誌, 29(1), pp.56-64, (2014)
2. 中島佳緒里・大渡佳世・奥村潤子「仮設住宅におけるボランティア活動を通じた看護学生の学び」, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8(1), pp.41-46, (2013)
3. 曾根志穂・武山雅志・金谷雅代・林静子・石垣和子「東日本大震災被災地における公立看護系大学の学生災害ボランティア活動の実態と課題」, 石川看護雑誌, 14, pp.127-134, (2017)
4. 中川杏奈・守田千純・山田実佳・伊丹君和「継続した被災地でのボランティア活動が現地の人々や看護学生に与える影響」, 日本看護学会論文集 看護教育, 45, pp.71-74, (2015)
5. 和井田節子・田中卓也・小林田鶴・小泉晋一「被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味」, 共栄大学研究論集, 15, pp.251-272, (2013)
6. 富澤弥生・一ノ瀬まきの・小野木弘志・鈴木千明・中村令子・三澤寿美「東日本大震災の仮設住宅における継続した看護支援ボランティア活動から看護学生が学び感じたこと」, 感性福祉研究所年報, 17, pp.161-168, (2016)